テ、

カ、ト、

をみ給ひて、なみだ雨のごとくにふらし給、

〔松屋筆記九十五〕て、とは父を云

父をて、といふは、ち、の通音也、體源抄十二本卷廿四丁オ八幡社例事條に、高祖父母ヒオホヂノテテハ、ノ事也、

〔宇治拾遺物語一〕これも今はむかし、ゐ中のちごのひえの山へのぼりたりけるが、櫻のめでたくさきたりけるに、風のはげしくふきけるをみて、このちごさめ〳〵となきけるをみて、僧のやはらよりて、〇中略なぐさめければ、櫻のちらんはあながちにいかゞせん、くるしからず、我て、の作たる麥の花ちりて實のいらざらんおもふがわびしきといひて、さくりあげてよ、となきければ、うたてしやな、

〔幽遠隨筆上〕父をて、と云も、神樂うたに、

さつて、がもたせの眞弓おく山にみかりすらしも弓のはづ見ゆ

此さつて、は、薩人の父といへるなり云々、愚案抄

〔安齋隨筆前編一〕ト、カ、　同書懷橘談に、凡小兒の言語明らかならざるゆへ、上の一字は云ひ侍れども、下の文字にうつり辨舌ならざるゆへ、下の假字をおどりていふたぐひ多し、母を上（カミ）といへば、カ、といひ、父を殿（ト）といへばト、といひ、亭といへばテ、と云ふが如し、貞丈云、カ、と云ふは則ハ、といふの訛なり、カとハと音横の相通也、（アカサタナハマヤラワ）父をト、と云ひ、又テ、といふは、音竪の相通也、（タチツテト）ハ、轉じてカ、となり、チ、轉じてト、となり、テ、となる也、小兒音の相通は知らねども、是れ音韻の自然也、上をカ、と云ひ、殿をト、と云ふ說は非なるべし、

〔倭訓栞前編六〕か、　卑俗に母をいふ、かとはと韻通ず、通鑑胡注に、齊諸王皆呼嫡母爲家々ともみゆ、田舍に妻をもか、といへり、兒に据ていふ也、西土に母を媽々といひ、鄉談に妻をも媽々と